

5 やさしい育成技術

子馬の管理方法 ～初期育成期の取り扱い～

日本中央競馬会 日高育成牧場 専門役 頃末 憲治

はじめに

軽種馬育成では生後から離乳までの期間を初期育成、離乳からブレーキングを開始するまで（大体1歳セリ頃）を中期育成と呼んでいます。子馬の発育に重要なものは、まず順調に成長するための抵抗力、そしてアスリートとしての競走馬になるための栄養および体力です。前々号では、初乳はなぜ重要なのか、また、初乳は何ヶ月まで子馬を細菌やウイルスから守ってくれるのかなど、初乳に関する様々な事柄について解説しました。そして、前号では子馬の管理方法のなかで、特に子馬に必要な栄養について解説し、成長著しい子馬に必要な栄養の重要性やクリープフィーディングを行うことの意義、およびこれらのバランスが崩れることによって、成長期に見られる様々な肢蹄異常について解説しました。

今号では、初期育成期の子馬の管理方法のなかでも、馬と人との信頼関係を構築するために特に重要な子馬の取り扱いについて説明します。生まれたての子馬がどのようなものであり、子馬に対するしつけや引き馬などの取り扱い方が、将来、非常に重要な意味を持つことについて理解していただければ幸いです。

生後間もない子馬の取り扱い

子馬の取り扱いについて触れる前に、出産から出産後の子馬の状態について解説したいと思います。

馬の出産は3つのステージに分けられています。妊娠中期頃から背中を下にして子宮内に位置していた胎子が、子宮内で回転し、娩出に備えて背中を上に向けた状態になり、その後破水が始まるまでの期間を第1ステージと呼んでいます。第1ステージでは母馬は落ち着きが無くなり、馬房内を歩き回ったり、発汗や軽い疝痛様症状を認めたりします。さらに子宮の収縮が強まると、破水が引き起こります。破水から胎子が娩出されるまでの期間を第2ステージと呼んでいます（図1）。通常、破水から約30分（10～60分）ほどで胎子が娩出されます。その後、胎盤（後産）が排出されるまでの期間を第3ステージと呼び、通常、胎子の娩出から約3時間以内に胎盤が排出されます。



図1 生まれたばかりの子馬

出産直後から、母馬は羊水で濡れている新生子馬の匂いを嗅ぎ、舐め始めます。この時点から母馬と子馬の絆が形成されるため、必要以上にタオルで子馬を拭くことは、親子間の絆を阻害する危険性があることを認識しておかなければなりません。生まれたての子馬は、よろけながらも生後1時間程度で立ち上がり、起立後はふらつきながらも乳房を捜し、生後約2時間で初乳を摂取します(図2)。出生直後の子馬が虚弱である場合には、腱組織が弛緩しているために球節が過度に沈下し、さらに蹄尖が地面から浮遊することも珍しくありませんが、それらのほとんどは生後2週齢までには、ほぼ正常な状態へと回復します(図3)。



図2 生後まもなく起立して初乳を飲む子馬



図3 生後間もない子馬の肢もとはおぼつかないものですが、2週齢になるとしっかりしてきます（左は1日齢、右は2週齢）

子馬の取り扱いは、競走馬としての将来への影響がきわめて大きいことから、その重要性について説明します。生後なるべく早い時期に子馬に触れることによって、子馬は比較的容易に人に慣れるようになるといわれており、いわゆる“刷り込み”が重要であると考えられています。生後3日目までにいかに十分に手を掛けるかということが、その後の馴致やしつけに対しても多大な影響を与えるものと思います。一方、過度な“刷り込み”は、母馬と子馬のスキンシップの時間を妨げ、母性の発達を阻害し、育児放棄の原因になったり、子馬が人を仲間と思い込み、人をリスペクトしなくなる一因となるともいわれています。特に初産や神経質な母馬の場合には、必要以上にタオルで拭くことによって、子馬の臭いを取り除かないように注意する必要があります。

子馬のしつけにはオンとオフを明確に行うことが大切です。人の要求に素直に従った後は、すぐに子馬へのプレッシャーを解除し、これで良いのだというのを理解させることが重要です。オフの状態を長くすることがしつけの原則であるといわれているように、プレッシャーオフのタイミングが非常に重要になります。また、子馬を取り扱う場合には、“点と線”ではなく、“面”で接すること、すなわち引き手のみで取り扱うのではなく、両腕を使用して面で保定することが重要であることも付け加えておきます。特に、生後1～2週齢までの子馬は虚弱であるので、しつけを重要視することなく、ストレスを与えないよう接しなければなりません。そのためにも、頭絡に通した引き手1本のみで保定するのではなく、両腕で抱え込んで保定します。たとえるなら、つきたてのお餅を丸めるような感覚で子馬をホールドします。

子馬の引き馬

1. 出生直後から2週齢までの引き馬

生後直後から2週齢までの引き馬は、左手で母馬の引き手を保持し、子馬には引き手を使用せずに、右腕で子馬の頸を軽く保持して歩かせます。生まれた直後の子馬はひ弱なため、引き手を用いて“点と線”で子馬を保定した場合には、子馬が何かに驚いてバランスを崩して転倒すると、頸部神経を損傷しやすいために引き手は使用せずに、子馬の肩から

頸の位置に手をまわして“面”で保定しながら、自発的に歩くようにさせます（図4）。仮に子馬が暴れて放馬しても、子馬は引き手で保持されていないために、容易に自身でバランスを保持できるので、事故も起きにくくなります。ひ弱な子馬にストレスを掛けない様に扱うという点でも、引き手を使用せずに頸から肩を保持する方法は有用です。



図4 2週齢未満の子馬の1人による引き馬

左手で母馬を引き、右腕を子馬の頸に回して保持します

出生直後のこの時期から、引き運動時には子馬と人の肩が同じ位置にして歩かなければいけないということを意識づけさせることによって、1歳のセリ馴致なども非常にスムーズに実施することができます。

1) 2人1組による引き馬

生後直後から2週齢までは、2人で親子1組を取り扱うのが原則となります。1人が左手で母馬を引き、右腕を子馬の頸に回して保持し、歩かせ、他の1人が子馬の右後方から子馬がまっすぐ進むようにサポートします。子馬が立ち止まろうとした場合には、右後方の者が子馬の尻を軽く触り、前に進むように促します（図5）。後ろから子馬の尻を叩くというよりも、軽く引っ掻く（スクラッチする）ように、刺激を与えるイメージで行うと子馬は抵抗なく前に進みます。



図5 2週齢未満の子馬の2人による引き馬

特に1週齢未満の子馬はひ弱なので、2人1組で行い、1人は後方からサポートします

2) 1人で行う親子の引き馬

生後直後から2週齢までは、2人で親子1組を取り扱うのが原則ですが、生後1週を過ぎると、自ら前進する子馬も珍しくはありません。このような場合には、1人で親子の引き馬を行うことが可能となります。前述のように左手で母馬を引き、右腕を子馬の頸に回して保持します。子馬が立ち止まろうとした場合には、子馬の頸を保持していた右腕を一時的に解き、右の手のひらで子馬の肋部後方を軽くたたいて刺激し、前に進んだ後には、再度、頸に回している右腕でスピードを調節します(図6)。



図6 2週齢未満の子馬の1人による引き馬

右の手のひらで子馬の肋部後方を軽くたたいて刺激し前進を促します

2. 2週齢以降の引き馬

引き手を使用する引き馬は、子馬の四肢がしっかりとしてくる2週齢以降から開始します。右手で子馬に装着した引き手を保持します(図7)。基本的には子馬を自発的に人の肩の位置で歩かせ、子馬が立ち止まろうとした場合には、右足で子馬の臀部を軽打することによって、前に進むように促します(図8)。右足で子馬の臀部を蹴るためには、人は子馬の肩の部位に位置しなければならないため、子馬を人より少し前で歩かせる意識が高まります。このような方法で引き運動を実施しておくと、子馬が立ち止まろうとした時に、人が子馬の肩より少し後ろに位置しようとするだけで、子馬は臀部を軽打されると感じるために、前に進むようになります。子馬が自発的に前に進む上田になると、後はスピード調整だけになるので、比較的容易に行えます。もうひとつ重要なポイントは、母馬が子馬より前に歩き、後方を歩いている子馬が止まった場合にはどうすることもできなくなるので、とにかく母馬より子馬を前に歩かせることです(図7)。



図7 2週齢以降の引き手を使った引き馬

引き手は頭絡の顎革に一本のロープを通して2本の余端を保持し、母馬より子馬を前に歩かすようにします



図8 子馬が止まったり前に進まないときには早めに尻を軽く蹴って前進を促します

子馬に装着する引き手は、止め具のない1本のロープを使用します。このロープを鼻革の下で折り返して2本の余端を保持します。引き手のナスカンを掛けずに、頭絡の顎革に一本のロープを通していただけなので、たとえ子馬が放馬し、引き手を踏んだとしても、ロープは容易に頭絡から抜け落ちるために、二次的な怪我を予防することができます。

子馬の体重が100kgを超えてくると、引き馬中、特に馬房から放牧地へと向かう途中に立ち上がろうとする馬も少なくはありません。このような場合には、引き手を保持せずに、人差し指と中指の2本の指で頭絡を直接保持し、引き馬を行います。そして、馬が立ち上がろうとした時に、頭絡を下方に引っ張って制御します。その後立ち上がろうとする試みが納まったら、下方へ保持している頭絡のプレッシャーを緩め、フリーに近い状態で保持します。このようにプレッシャーとオフを明確に使い分けることで、立ち上がる馬の矯正を行います。この時に、5本の指、全てで頭絡をわし掴みにすると、プレッシャーオフが伝わりにくくなり、また、引き手を使用して制御すると、容易に立ち上がらせてしまい、さらに制御するタイミングが遅れやすくなるので注意が必要です。

3. 子馬が立ち止まったときの対処法

子馬が立ち止まり、あるいは後退しようとした場合には、引き手を引っ張らずに、子馬を中心に母馬とともに一回転する間に子馬を前に出し、さらに前進させるために右足で子馬の尻を軽打します。回転が終わり、進行方向に向かう時には、子馬の肩に位置するよう

に回転中に全身規制を与えます（図9）。

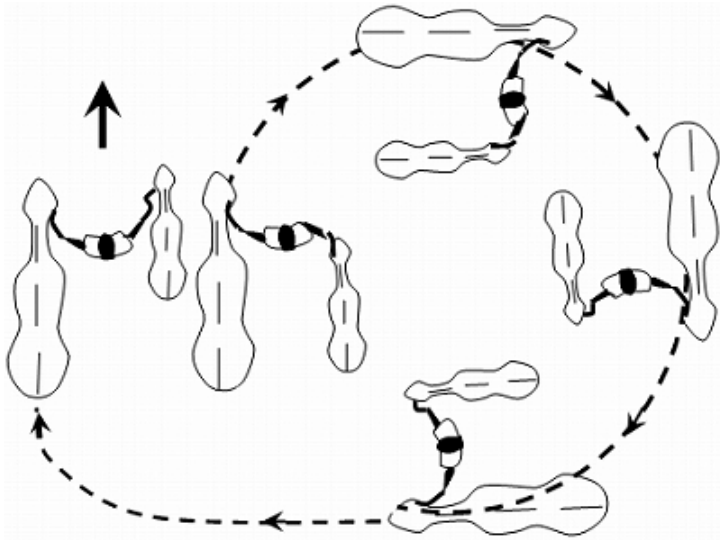


図9 子馬が止まったり、前に進まないときの対処法
引っ張らずに子馬を中心に母馬とともに回転します

4．引き馬についてのまとめ

子馬の取り扱いの原則ですが、馬とは基本的に作用に対して反抗する動物ですので、引き手のプレッシャーがない状態、すなわちニュートラルな馬自身のバランスで歩かせることを最終目標とします。子馬が立ち止まり、あるいは後退しようとした場合に、引き手を引っ張れば、子馬は反抗して後退しようとしています（図10）。立ち止まる前に足で尻を軽打して、子馬に前進を促します。そのためには、人は常時、子馬の肩に位置していなければなりません。子馬を母馬よりも前で歩かせることによって、人が自然に子馬の肩の位置することができます。子馬が自発的に前進すれば、馬のバランスを尊重し、プレッシャーオフの状態で子馬の肩の位置で付いていくだけです。この時期から人との良い関係を作るとは、将来の馴致時にも非常に役立ちます。

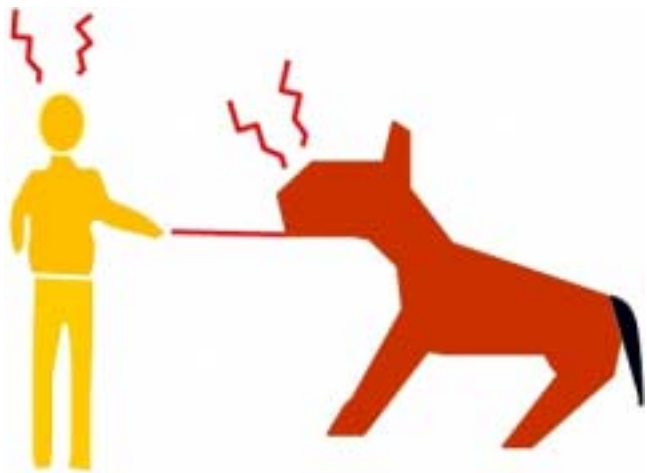


図10 子馬を引っ張らなければならない状態になる前に対応することが重要です

子馬の治療や削蹄を行う場合には、子馬を保定しなければなりません。子馬は馬房の中央で引き手のみを保持して“線”で保定するのではなく、馬房のコーナーで、両腕と壁を利用して“面”で保定します（図 11）。前肢の削蹄時には、後退して逃げようするので、臀部が馬房のコーナーの壁に向かうように保定します。一方、後肢の削蹄時には、前進して逃げようとするので、頭部が馬房のコーナーの壁に向かうように保定します（図 12）。いずれの場合も、子馬の頭側に保定した母馬を起立させることが重要です。母馬が目の前にいることによって、子馬も母馬も必要以上に興奮することが少なくなります。

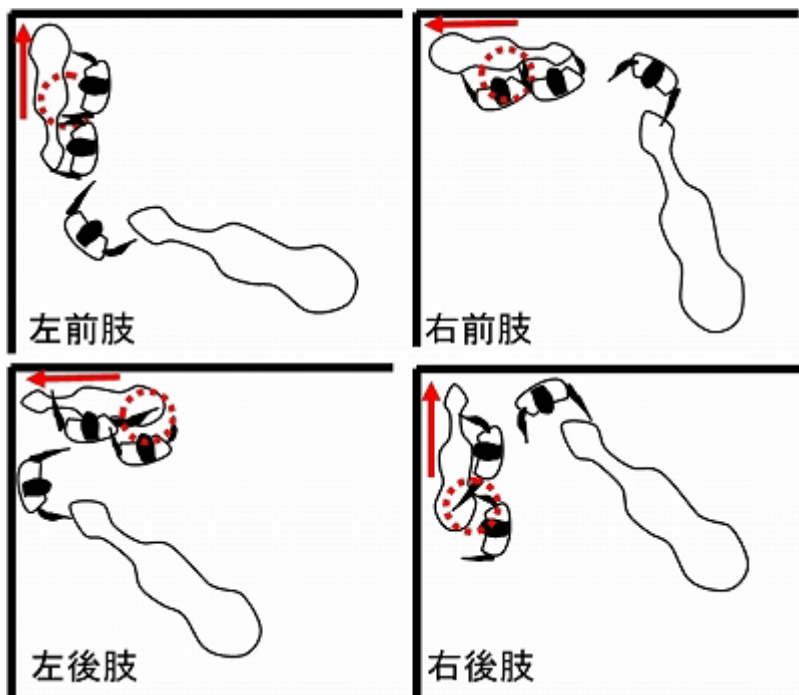


図 11 馬房の壁を利用した左右前後肢の装削蹄時の位置
子馬を“面”で保定し、母馬は子馬の目の前に立たせます



図 12 子馬の保定方法
左が前肢の装削蹄時（臀部を壁側に）右が後肢の装削蹄時（頭側を壁側に）

子馬のしつけのポイント

子馬の取り扱いは、競走馬としての将来への影響がきわめて大きいため、重要なものとなることを再度強調しておきます。

最後に、子馬のしつけのポイントについてまとめてみました。

子馬には生後なるべく早い時期に触れましょう。

出生後、なるべく早く子馬に触れ、“刷り込み”を行なうことによって、取り扱いが容易になります。生後3日までに十分に手を掛けることが、その後の馴致やしつけに対しても多大な影響を与えます。

ただし、過度な“刷り込み”は、母馬と子馬のスキンシップの時間を妨げ、母性の発達を阻害する一因にもなるので、特に初産の場合には、必要最小限の“刷り込み”にとどめましょう。

馬と人との信頼関係の構築を心がけましょう。

馬を屈服させるのではなく、要求に従ったら直ちにプレッシャーを解除することによって、従順になるように仕向けることが重要です。馬を精神的に追い込んで、パニックに陥れてはいけません。馬は常にリラックスしたニュートラルな状態であるのが理想です。そのためにも、子馬を愛撫し、穏やかに優しい言葉をかけるよう心がけましょう。